

「和刻三言」採録篇に見える小説の 評價について

—施訓者の序を手掛かりに

宮 本 陽 佳

日本學術振興會

はじめに

近世中期頃、唐話學の流行に伴って多くの白話小説が日本に渡來した。それらは當初唐話學習者の教材として用いられたが、やがて讀み物として廣く人々の興味を惹き付けていく。その時流の中で刊行された『小説精言』（寛保三／一七四三年刊、以下『精言』と略）、『小説奇言』（寶曆三／一七五三年刊、以下『奇言』）、『小説粹言』（寶曆八／一七五八年刊、以下『粹言』）は、短篇白話小説集「三言二拍」^①等から選出した短篇小説の本文に、訓點や左訓を施したものである

「和刻三言」採録篇に見える小説の評價について（宮本）

る。三作併せて「和刻三言」「小説三言」等と稱されるが、以下本稿では「和刻三言」と呼ぶ。『精言』『奇言』は當時唐話學の先驅者の一人であった岡白駒（元祿五／一六九二—明和四／一七六七）が、『粹言』は白駒の下で唐話や白話小説を學んだとされる澤田一齋（元祿十四／一七〇一—天明二／一七八二）が手掛け、一齋が主人を務める京都の書肆、風月堂から刊行された。

「和刻三言」は當時の白話小説受容の形態を窺わせる興味深い資料であり、つとに石崎又造氏がその價值を指摘して以來^②、様々な方面から研究が進められている。本稿で検討しようとするのは、「和刻三言」採録篇の選擇基準、その背景にある施訓者達の小説評價の方法である。

「和刻三言」に収録された短篇白話小説は、『精言』に四篇、『奇言』五篇、『粹言』五篇の計十四篇である。本稿末尾に掲げる表一に、各巻の題と原據を示しているので参照されたい^③。數ある短篇小説の中からこの十四篇が選擇された背景には、施訓者達によって何らかの基準が設けられていたことが豫想される。「三言二拍」には様々なテーマ

の短編小説が収められているが、彼らは採録に際し小説のどのような點を重視していたのだろうか。

今日までにこの問題を取り上げた論考には、尾形竹氏のものがある。尾形氏は「和刻三言」の採録篇や、「三言二拍」の翻案として知られる都賀庭鐘の『英草紙』が素材として利用した小説の特性に言及した上で、次のように指摘した。^④

一齋が『小説精言』の序に「小説亦一家已。(中略) 俚言駢人、徵直爰居之鐘鼓也」といい、庭鐘が『英草紙』の序に「鄙言却て俗の傲となり、これより義に本づき義にすむ事ありて、半夜の鐘聲深更を告ぐるの助とならんこと、近路行者・千里浪子(ともに庭鐘の匿名)の素心なる哉」と述べているように、かれらはそこに、單なる娛樂消閑の具にとどまらず、ある意味で政教につながり、儒家の一翼を擔うべき意義を見出す。

ここで尾形氏は「一齋が『小説精言』の序に云々」と、『精言』巻一の表紙見返し部分に付された一齋の文を挙げ

る。^⑤ただこれは「和刻三言」採録篇の選擇基準を汲み取るには少々短く、また當然ながら白駒の意圖は讀み取ることが出来ない。

「和刻三言」には、『精言』に白駒の序、『粹言』に一齋の序が、それぞれ二丁から三丁程度の分量で付されている。管見の限り詳しく検討されたことはないようだが、本稿ではこの二つの序に注目し、「和刻三言」の採録篇や二人の小説の評價について検討することを試みたい。また二人の序は、「和刻三言」の刊行意圖や當時の白話小説の受容層を探る上でも有用なものになり得ると考えられる。

一 想定される選擇基準とその問題點

「和刻三言」採録篇について本格的に言及しているのは、管見の限り先に挙げた尾形氏のみである。ここではまず尾形氏の説を整理し、想定された選擇基準とその問題點を確認しておくたい。^⑥

尾形氏はまず「三言二拍」に關する先行研究を挙げ、ここに收められる短篇小説の一部には、「當代庶民の心情に

近い立場に立つて、戀愛を中心とする庶民の生活を主として描いている點に、これらを士大夫の文學と區別する大きな特色」があると述べる。一方で「和刻三言」に採られた戀愛物は「相思相愛の眞情を謳うというよりも、外^トつ國^{クニ}の風流奇談への興味といった色合いが濃^ノく、また女性を主人公とするものは採られていない（『西湖佳話』からの採録を除く）ことを指摘する。更に「それぞれに四ないし五篇の短篇を収めた各書の、各巻頭の諸篇が重い意味を擔つているとするならば」と前置きした上で、各巻頭に置かれた小説の庶民性の低さを指摘し、白駒と一齋は「士大夫の文學」を重視していると結論付ける。

次に、『精言』卷一についての氏の見解を示しておこう。『精言』卷一「十五貫戲言成巧禍」の梗概は次の通りである。

臨安の劉貴はある日「商賣の元手に」と舅から十五貫の錢を與えられたが、妾の陳氏には「これはお前を賣つた金だ」と冗談を言う。これを眞に受けた陳氏はその夜家を抜け出し、明朝兩親の元へと向かう。同じ夜、

「和刻三言」採録篇に見える小説の評價ついで（宮本

鍵が開いたままになった劉家に賊が入り、錢は奪われ、劉貴は殺されてしまった。陳氏は途中道連れになった青年と共に連れ戻され、劉貴を殺した疑いで裁判にかけられる。青年が偶然十五貫の錢を持っていたことから、二人は拷問の末處刑された。一年後、劉貴の妻・王氏が實家に戻る途中、賊に襲われてその妻にされる。後、その賊が劉貴を殺した眞犯人だと知った王氏は法廷に訴えて、賊は處刑された。

この話は次の詩で締めくくられる（訓點は『精言』の通り）。

善^ニ惡^ニ無^シ分^テ總^テ喪^レ 只^ニ因^テ戲^シ語^ニ釀^レ斯^レ殃^ニ危^ヲ。
勸^レ君^ニ出^ス 話^ヲ須^シ誠^ニ信^ニ 口^ニ舌^ニ從^テ來^ニ是^レ禍^ニ基^ヲ。

これに従えば、この話の主旨は「口舌從來是レ禍基」ということになろうが、尾形氏は白駒らが重視したのは「一時の冗談がとんだ災禍を招いたという他愛もない話の筋よりも、凡庸な役人の、拷問によって一時を糊塗した輕率な裁判が、いかに人民を不幸に墮れるかという批判」であるとし、「そこには本來政治への責任をもつべき者としての

一つの關心がある」と述べた。氏はこのような見方から、白駒や一齋が「士大夫の文學もしくは文人の文學」を重視し、更に「三言二拍」の中に「ある意味で政教につながり、儒家の一翼を擔うべき意義」を見出していると考察する。

ただし、後に示すように、一齋は妓女を話の中心に据える「杜十娘怒沈百寶箱」等も同シリーズで刊行しようとしていたと推測され、「士大夫の文學」ばかりを重視していたとは必ずしも言い切れない。尾形氏の説は示唆に富むが、再考の餘地も残されているように思われる。先述のように、作品の選擇について言及しているのは氏のみであり、未だ議論が盡くされたとは言い難い。別の角度から考えることは出来ないか、次節より白駒・一齋の序と「和刻三言」収録篇の性格を検討する。

二 岡白駒による小説の評價

二一 a 白駒序と『今古奇觀』序の類似

『精言』に付された白駒の序について、まず注目される

のは冒頭部分が『今古奇觀』序に類似している點である。

『今古奇觀』は「三言二拍」に収録される延べ二百篇の短篇小説の中から、四十篇を採録した選集である。「抱甕老人」編とされ、序は「笑花主人」なる人物が付しているが、この二人についての詳細は不明である。明末頃に成立し、その後清末に至るまで様々な版本が作られた。そのため傳本は「三言二拍」に比べて數、種類ともにはるかに多く、日本にも複數舶來している。版本間には文字の異同等が見られるが、序の内容は概ね同じであるように見受けられる。^⑦

次に白駒の『精言』序と、『今古奇觀』序の冒頭を併せて掲げる。特に近似している箇所には傍線を付し、對應關係を示した(句讀點、書名を示す)は筆者による。以下同。

『精言』序

小説者、史之裂也。馬貴與列諸子家、盖以其爲一家已。

討厥源流、則助乎『燕丹子』、次之、曼倩『神異』同

『洞冥』諸記、茂先『博物志』、令升『搜神記』、彦升

「述異」、休文「齊諧」。學者多稱焉。『漢武內傳』、『飛燕外傳』、雖曰別史、亦古之小說也。自此已還、如「虬髯」、「紅線」、「隱娘」、「白猿」諸傳、雖近誣誕乎、辭資于史漢。總厥歸塗。則皆史之流亞也。南宋孝宗以天下養太上皇。倦勤之餘、牽黃臂蒼、不足以娛其心、廼命待從、日訪民間奇事、以給逍遙之具。是通俗演義一種、乃始盛行。

『今古奇觀』序^⑧

小説者、正史之餘也。『莊』、『列』所載化人、僂僕、丈人昔事、不列於史。『穆天子』、『四公傳』、『吳越春秋』、皆小説之類也。『開元遺事』、『紅線』、『無雙』、『香丸』、『隱娘』諸傳、『輦車』、『夷堅』各誌名爲小説、而文雅馴、閭閻罕能道之。優人黃繡綽、敬新磨等搬演裸劇、隱諷時事、事屬烏有、雖通於俗、本不傳。至有宋孝皇以天下養太上、命侍從、訪民間奇事、日進一回、謂之說話人。而通俗演義一種、乃始盛行。

書出しの形や、様々な書名、孝宗の名前を舉げて「通俗演義」の興りを語る展開は全くの同文ではないが類似して

「和刻三言」採録篇に見える小説の評價ついで（宮本）

おり、白駒が『今古奇觀』序を参照していたことが窺われる。『今古奇觀』が「和刻三言」の底本として使用されるのは「奇言」以降であるが（表二）、當時「三言二拍」よりも多くの版本が流布していた可能性が高いことを考えれば、白駒が「精言」の刊行時、或いはもっと早くに、その序文を閲覽することは難しくなかったと推測される。

先述の通り、『今古奇觀』は「三言二拍」より短篇小説を採録したものであり、序だけでなく、作品選擇の基準についても、「精言」に何らかの影響を與えた可能性が考えられる。次に『今古奇觀』の序と收録篇の傾向について確認し、「精言」との共通點を探ってみたい。

二一b 『今古奇觀』の收録篇選擇について

『今古奇觀』序については、材木谷敦氏が「三言二拍」各序と比較しながら詳細な検討を行っている。^⑨ 材木谷氏は、「『今古奇觀』序は、（「三言」の神仙・怪異譚を重視しなかつた『今古奇觀』同様？）即——現實的である。」と述べ、また『今古奇觀』序が現實性に執着していたのは讀者の「風

化（上層の者が下層の者を「風で化する」こと）を重視したためであろうと推測している。

次に『今古奇觀』序の中で、小説の現實性と風化の關係について述べられている箇所を掲げる（譯は筆者による。譯中の（ ）は筆者が補った箇所である。以下同）。

然『金瓶』書麗、貽譏於誨淫。『西遊』、『西洋』逞臆於畫鬼。無關風化、奚取連篇。……夫天下之眞奇在、未有不出於庸常者也。仁義禮智、謂之常心、忠孝節烈、謂之常行、善惡果報、謂之常理、聖賢豪傑、謂之常人。然常心不多顯、常人不多見、則相與驚而道之。聞者或悲或嘆、或喜或愕。其善者知勸、而不善者亦有所慚惡悚傷、以共成風化之美。『金瓶梅』は書きぶりは美しいが讀者の淫欲をそそのかす面で批判を招き、『西遊記』『西洋記』は存在しないことを描いた面で勝手な憶測であつた。風化に無關係であれば、篇を重ねてもどうして評價出來ようか。……天下の眞の奇（平凡ではなく素晴らしいもの）は常にあるごく普通のものから出ないものはないのだ。仁義禮智、これは不變の心で

あり、忠孝節烈、これは不變の行い、善惡果報、これは不變の理、聖賢豪傑、これは不變の人（ゆるがない人）である。不變の心は表面には現れず、不變の人は多く現れないが、（現れれば）驚いてこれを言う。これを聞く者は、或いは悲しみ或いは嘆き、或いは喜び或いは驚く。善者は勸善を知り、善でない者もまた恥じ怖れるところがあり、兩者は一緒に風化の美を成すのである。』

右の傍線を付した箇所からは、現實や普通のことを重んじる考えが窺われる。材木谷氏は「小説が現實的であれば受容者にとっては自身の世界とのギャップが少なく、結果、風化の効果が上がると考えられていたのだろう。」と推測している。

實際に収録された小説の性格については、千田九一氏による言及がある。千田氏は、『今古奇觀』が「三言」の中でも「靈怪的、神鬼的な宋元舊話本」を概ね除外していることを指摘し、「これは編者がもっぱら現實を重視したためで、この點、かなりの見識を示しているものといつてよ

かろう。」と述べる。更に収録された作品は「總體的に市民の思想感情を代辯し、現實の社會にするどい批判の眼をむけている。」と指摘している。¹⁰⁾

小説の教訓性や效用を説くような序は、しばしば建前であるという見方がされる。しかし近年、大木康氏は「三言」について、序に見える意圖が収録作品に反映されていることを示し、序を「韜晦と見做したならば、編者馮夢龍の意圖を正しく捉え得なくなる。」と指摘した。¹¹⁾『今古奇觀』についても、序に見える意圖と作品の性格に乖離があるように思われない。『今古奇觀』の編者も實際に現實的な小説を評價していたと見てよいであろう。

では、白駒の『精言』はこの『今古奇觀』の態度をどのように承けているのだろうか。次に序と作品の性格を併せて検討する。

二一c 『精言』『奇言』に見える現實性

白駒は『精言』序の中で、小説や通俗演義について次のように述べる。

「和刻三言」採録篇に見える小説の評価について（宮本）

或快人情所欲、或洩衆心所憤。無聊之極思、其間彰善瘴惡。勸戒與奪、樹之風聲。¹²⁾ 實良史之遺意也。¹³⁾ 蠶蠚鄙諺、取乎禮典、狸首淫哇、或可箴戒。托談見志、因事道治。列諸子家、誠亦非妄置矣。（ある時は人の心の欲する所を喜ばせ、ある時は人々の怒りを晴らす。暇をもてあましている間に（これを讀んで）、善をたたえ惡をにくむ。（善を）勸め（惡を）戒め、（善には）與え（惡からは）奪い、よい風（教え）を立てて見習わせる。まこと優れた記述者の遺した心である。「蠶と蟹の甲羅」のような俗なたとは『禮記』に採られ、「狸の頭」というふざけた歌も、或いは人の戒めに役立つだろう。話に託して志を表し、事に因って治を論ずる。（小説家を）諸子家に並べたのは、本當にいい加減なことではないのである。」

「或快人情所欲、或洩衆心所憤。」という記述からは、小説が讀者の心情に寄り添うものという認識が、續く「彰善瘴惡」「或可箴戒」からは、讀者の風化を意識していることが読み取れる。白駒の序には、『今古奇觀』に見られ

た讀者に近い世界の重視、讀者の風化といった認識が表れているように見受けられる。ちなみに、「蠶蟬鄙諺」から「或可箴戒」までの句は『文心雕龍』『諧譚』篇に基づく表現と見て相違ないが、これについては後述する。

次に、収録されている小説の性格について検討する。

『精言』に収録される四篇は二十四卷本『醒世恆言』（二十四卷二十四篇。以下「二十四卷本」と略）から採られたと推測されるのであるが、結論から言えば、選ばれたものと選ばれなかつたものには、現実的・非現実的という對立を見出すことが出来る。

筆者が今回非現実的な小説であると判断したのは、神や幽霊等存在し得ないものが登場するもの、また登場人物が靈力等を操って不思議な現象を起こす、動物が人間のようには振舞う等、現実には起こり得ない出来事が描かれているものである。次に全卷の題（本文題）を挙げ、非現実的と判断されるものには圍み線を付して示す。『精言』収録篇には二重傍線を付した。

卷一 「兩縣令競義婚孤女」 卷二 「徐老僕義憤成家」

卷三 「十五貫戲言成巧禍」

卷五 「大樹坡義虎送親」

卷七 「三孝廉讓產立高名」

卷九 「陳多壽生死姻緣」

卷十一 「蘇小妹三難新郎」

卷十三 「勘皮靴單證二郎神」

卷十五 「赫大卿遺恨鴛鴦繡」

卷十七 「張孝基陳留認舅」

卷十九 「樂小舍拚生冤偶」

卷二十一 「張淑兒智脫楊生」

卷二十三 「誇妙術丹客提金」

卷四 「灌園叟晚逢仙女」

卷六 「小水灣天狐詒書」

卷八 「喬太守亂點鴛鴦譜」

卷十 「劉小官雌雄兄弟」

卷十二 「佛印師四調琴娘」

卷十四 「一文錢小隙造奇冤」

卷十六 「陸五漢硬留合色鞋」

卷十八 「吳衙內鄰舟赴約」

卷二十 「鄭節使立功神臂弓」

卷二十二 「呂純陽飛劍斬黃龍」

卷二十四 「黃秀才徵靈玉馬墜」

題からも窺われるように、例えば卷四には花の精や仙女が登場し、卷二十四には「玉馬墜（玉で出来た馬の根付）」が靈力によつて本物の白馬になる場面がある爲、非現実的と判断した。今回定めた基準で考えると、二十四卷本は全體の三分の一を非現実的な小説が占めていることになるが、『精言』はそのような小説を一つも収めていない。

またこの中から卷十「劉小官雌雄兄弟」が『奇言』卷二

に採られているが、これも非現実的な要素を含まないものである。『奇言』の二十四卷本に基づかない他の四篇にも、非現実的な要素は見出せない。無論偶然である可能性も否定は出来ないが、『今古奇観』序との關係を考えれば、白駒が意識的に避けた可能性は高いと言えるのではないだろうか。

ただここで疑問に思われるのは、白駒が影響を受けているのが『醒世恆言』ではなく『今古奇観』と考えられることである。全篇を二十四卷本『醒世恆言』から選んだのなら、その序等に倣うのが自然であるように思われる。なぜ『今古奇観』に據っているように見えるのだろうか。

要因は、おそらく白駒が『醒世恆言』ではなく『今古奇観』が示した小説の評價に共感したことにあると考えられる。更にその背景には、すでに彼が『文心雕龍』から強く影響を受けていたことがあつたと推測される。

二 d 『文心雕龍』の影響——「諧辭謔言」と「小説」

『文心雕龍』は南朝梁の劉勰が著した文學理論書である。

「和刻三言」採録篇に見える小説の評價ついて（宮本）

白駒はこれに訓點を施し、享保十六（一七三二）年に大阪の書肆から刊行した。これが彼の最初の刊行著書である。また現在確認される限り、『文心雕龍』に施訓して刊行するというのはこれが日本で初めてのことであつた。その内容は、いくらか誤りはあるものの、かなり正確に理解した上で施訓していると評價されている¹⁵。本節を始めるにあたり、まずは白駒の著述活動における『文心雕龍』の位置について確認しておきたい。

作者の劉勰は、『文心雕龍』「序志」篇においてその著作の動機を述べる。彼は三十歳を過ぎた頃に孔子に随つて行く夢を見て感動を覺えた。孔子の教えを讀み廣めるためには經書の注釋を書くことが最もよいと考えたが、すでに先行の學者が優れたものを書いていて、そこで、聖人の教えを伝える文章の重要性に着目し、正しい文章のあり方を論じて今の世の亂れた文章を矯正することにした、と言う。このため、『文心雕龍』は儒教の教えを重んじ經典の文章を最高位に位置付けている。白駒もこれを承け、和刻本に自ら付した「刻文心雕龍序」¹⁷では、「夫聖賢之書辭總稱文

章。傳曰、文以載道。夫子之文章、可得而聞、則吾舍文辭何適矣。(聖賢の書の文辭はすべて文章という。傳に言う、「文は以て道を載す」と。「夫子の文章は、得て聞くべし」というのだから、文辭を捨ててどこに聖人の教えを求めることが出来るようか。)」と文章の力を説いている。この序は享保十六年三月のものだが、白駒は「餘夙嗜此書。(私はつとにこの書に親しんでいた。)」と、以前からこの書に關心を寄せていたことを記している。『文心雕龍』は彼のその後の著述活動に大きな影響を与えたと考えられ、『精言』序の中にも文辭について觸れる箇所がある(後述)。彼は儒者として經典の注釋に注力したが、字句の解釋が主であつて思想的に見る所はないとされ、今日もその評價は高くない¹⁹⁾。ただそれも、『文心雕龍』に刺激されて文章そのものにこだわつた結果ではないかと想像される。

白駒が『文心雕龍』に親しみ、刊行したきっかけは、荻生徂徠ら古文辭派に對する關心であつたといふ²⁰⁾。戸田浩曉氏は、「儒を以て世に立たうと決心した」白駒が古文辭派の方法、「古文古語に通曉することによって、六經の眞義

を究めるといふ解經上の方法論」に魅力を感じ、そこで更に一步進めて「眞の文辭」とはいかなるものであるかを明らかにしようと考え、『文心雕龍』に注目したと推測している。白駒は一時江戸に遊學して古文辭派に接したと見られ、唐話の習得もそこでの經驗が關係していると考えられている。元より唐話學の必要性を唱えたのは徂徠であり、白駒の學問が古文辭派を強く意識したものであつたことは明らかである²¹⁾。彼の學問の起點に、當時一世を風靡した古文辭派と、「積極的にはその運動の正常な展開への側面的援護と消極的にはその弊害の是正」(注²⁰⁾戸田氏)のために刊行した『文心雕龍』があつたことは、彼の白話小説研究を考える上でも見逃せない。

この點を踏まえ、先に掲げた『精言』白駒序における『文心雕龍』の引用について検討していきたい。引用されたのは「諧謔」篇、鄙俗な歌や隱語の意義について述べられている項の一部である²²⁾。

夫心險如山、口壅若川。怨怒之情不一、歡諱之言無方。……又蠶蠚鄙諺、狸首淫哇、苟可箴戒、載于禮典。故

知諧辭譎言、亦無棄矣。(人民の心は山のように險しく、民衆の口が塞がれるのは、川がせきとめられるようなものだ。怨みや怒りの感情はいろいろであり、よろこびやおどけの表現はさまざまである。……また「蠶かと蟹かの甲羅」という鄙俗なたとえや「狸の頭」というふざけた歌でも、かりそめにもせよ、それが人の戒めに役立つものには、『禮記』に記載されている。だから、諧辭ざれいごや隱語も、一概には棄てられぬことがわかる。)

傍線部が白駒による引用箇所であるが、その前の人民の心についての箇所も、彼が『精言』序の中で「或快人情所欲、或洩衆心所憤。」と述べたことに影響している可能性が考えられる。

戸田氏は『精言』序における『文心雕龍』の引用について着目し、「蠶蟹云々の四句は明らかに文心雕龍諧譎篇から得來つたものである。」と指摘した上で、白駒の『精言』『奇言』刊行について次のように述べた。²⁴⁾

文章の本源を五經に求め、經書を最高の文章として尊

「和刻三言」採録篇に見える小説の評價ついで(宮本)

重する一方、凡ゆる文章に經典扶翼の意義あることを承認した結果、いはゆる諧辭譎言と雖も苟も箴戒に資すべきものは之を禮典に載せたとして、左傳の睥目皤腹の謳や禮記の蠶蟹の鄙諺を評價した劉勰の徹底的な文章載道説を想起するならば、詩書論孟に註した白駒が一方に於て小説精言や小説奇言を著したのは決して偶然ではないであらう。

先にも觸れたように、白駒の業績は六經等古典の注釋が多くを占める。白話小説に關する刊行著書が『精言』『奇言』のみであるのに對し、古典の注釋は『孔子家語補註』や『孟子解』、『蒙求箋註』等數多く刊行している。白駒はしばしば同時期にあつた唐話學者・岡嶋冠山と並べられることがあるが、その業績の多くが唐話の教科書である冠山は、白駒とは根本的に立場が異なると考えるべきであろう。白駒が唐話を習得したのは、時の流行ということがあつたとしても、最終的には經典・古典の正しい理解のためであつたと考えられる。その彼が白話小説の譯解までも手掛けた要因については、やはり戸田氏が「時世の影響を全く否

定はできないにしても、やはり彼自身俗語文學に對するはつきりした考へ、すなわち「文心雕龍によつて學び得たところの小説に對する評價の仕方」があつたと推測している。²⁵⁾

『今古奇觀』との関連に話を戻せば、「諧謔」篇に見える人の戒めに役立つものを評價するという姿勢は、『今古奇觀』序が讀者の風化を重視したことと共通しているように見受けられる。『醒世恆言』序にも、『今古奇觀』ほど直接的ではないが讀者の風化を意識したと思われる箇所があり、『今古奇觀』序に見える風化という概念は「三言」の序から繼承されたものと推測されているが、その重要性の認識は少々異なっている。先に挙げた材木谷氏（注⑦所引論考）は、「三言」の序が「直接的な（小説）の力を信じて、（小説）は風化のためになると力説」し、風化を小説の美點とするのに對し、『今古奇觀』序は「無關風化、奚取連篇。」と述べて風化を小説の尺度、或いは條件としていることを指摘し、『今古奇觀』序において風化は強化されたと結論付けている。『文心雕龍』「諧謔」篇では人の戒

めに役立つということが『禮記』に掲載される條件とされており、『今古奇觀』序に近い認識が示されていると言えよう。

また、『文心雕龍』の中には、作品の現實性への言及も見える。『楚辭』を論じた「辨騷」篇では、『楚辭』が高い文學性を持ちながらも『詩經』とは異なる理由が次のように述べられている。²⁷⁾

至於託雲龍說迂怪、豐隆求宓妃、鳩鳥媒媵女、詭異之辭也。康回傾地、夷羿彈日、木夫九首、土伯三目、譎怪之談也。……摘此四事、異乎經典者。〔雲や龍に託して怪奇めいたことを説き、雲師に命じて神女を求めさせ、鳩鳥に仲人をさせるなどというのは、人をあざむく言葉である。康回が大地を傾斜させたとか、夷羿が弓で太陽を射落としたとか、九つの頭の大力漢や三つ目の土神などの話は、信じ難い話である。……以上の四點からすれば、『楚辭』は經典と異なるものである。〕

右の説明からは、劉勰が非現實的な内容に否定的である

ことが読み取れる。「怪力亂神」を語らない孔子を讀えようとした劉勰であるから、このように述べたのは當然のことであると見えよう。

著述活動の始めに經典史上主義とも言うべき『文心雕龍』から影響を受け、また經典の注釋に力を入れていたことを鑑みれば、白駒が非現實的な要素を避けたのは自然なことであつたと言える。そして、非現實性を排除し、讀者を風化する小説を集めたという『今古奇觀』は、短篇集を編む際の手本になつたと想像される。

後にも觸れるように、江戸幕府が儒教を教學と定めた近世期には、非現實的な話を語ることは難しかったと豫想され、避けるのはむしろ當然のことと考えることも出来る。しかし當時においてそのような態度が一般的であつたとも言い切れない。次に白駒に學んだとされる一齋がどのよう
に考えていたのか、検討してみよう。

三 澤田一齋による小説の選擇・評價

次に引用するのは、『粹言』序において一齋が小説につ

「和刻三言」採録篇に見える小説の評價ついて（宮本）

いて述べている箇所である。

既有正史、逸史獨可無哉。如斷如續、爰夫稗官小説、乃寫出楓宸永巷、以至三家村中容膝支頤、鶉居麀集、極細極精處、異樣奇特事。遂出正史外、別爲鏡花水月三昧。²⁸……此其所以言歡則木梗怡顏如巧啖、說戚則偶象頓顛而滂沱、譬諸鴻羽沈於弱水、玉石漂於飛波。²⁹設猶未足爲妙也、善讀者取以視焉、則正史所不載不掌、極細極精處、異樣奇特事、瞭々乎心目之間生。〔正史があるのに、逸史がどうして無くてよかろうか。（逸史は）斷續的に存在し、ここに稗官小説が、（正史が描かない）宮廷の奥深くや、邊鄙な村の狭い部屋で頰杖をついたり、簡素な家に人々が集まっている所等、大變細かなこと（庶民の生活等のことか）や、不思議で珍しいことまで描き出す。そうして正史の外に出て、（史實とは異なる）優れた境地に至っている。……これは、（稗官小説が）喜ばしい言葉を語れば木偶人形も顔綻ばせて笑い、悲しい言葉を語れば偶像も顔をしかめて涙を流し、例えば軽い鴻の羽も弱水に沈み、玉石

も大波に漂うようである所以である。これを妙とするに足らなくても、よい読み手が讀めば、正史にない細かなことや不思議で珍しいことが、心と目の間にありありと現れる。」

ここには、「異様奇特事」や「言歡則木梗怡顏如巧笑」等、少々現實離れた印象を受ける表現が見える。一齋の言う「異様奇特事」には、非現實的な要素は含まれるのか、次に収録篇の性格から検討する。

『粹言』五卷は『今古奇觀』からの採録が多いこともあって(表一)、非現實的な小説は見出されない。注目されるのは未刊に終わった卷六から卷十である。『粹言』巻一の表紙見返しには一回(卷二)から十回(卷十)までの題が刻されており、六卷以降の刊行準備がすでに始まっていることが窺われる。次に未刊の回到傍線を付して示す。

- 一回 王荊公三難蘓學士
- 二回 轉運漢巧遇洞庭紅
- 三回 呂太郎還金完骨肉
- 四回 包龍圖智賺合同文

- 五回 懷私怨狼僕告主翁
- 六回 拗相公飲恨半山堂
- 七回 兩縣令競義婚孤女
- 八回 樂小舍拚生覓佳偶
- 九回 杜十娘怒沈百寶箱
- 十回 白娘子永鎮雷峰塔

このうち、八回到に豫定されている「樂小舍拚生覓佳偶」(『警世通言』卷二十三、二十四卷本卷二十九)には主人公・樂和が川に落ちた娘を川底の潮王廟に迎えに行つて、小鬼や神人(潮王)に出會う場面が描かれる。また十回到に豫定されている「白娘子永鎮雷峰塔」(『警世通言』卷二十八)は白蛇が人間の女の姿となつて戀慕う男の前に現れる話であり、いずれも非現實的な要素を含んでいると言える。

また、一齋は二十四卷本卷六「小水灣天狐詒書」の自筆稿本を残しており、『粹言』に收めるつもりで筆を執つたものと推測されている。³⁰これも狐が人間の姿になつて現れるという非現實的な要素を含んでおり、白駒が意圖的に採録を避けたと推測されるものである。以上のことから、一

齋は白駒に比べ非現實的な要素を含む小説にも積極的な價値を見出し、「和刻三言」に取り入れようとしていたことが窺われる。ただし、右に挙げた三つの作品は、「和刻三言」のシリーズとしても、別の單獨のものとしても、刊行は確認出来ない。

四 施訓者二人の白話小説の認識

白駒は非現實的な要素を持つ小説を取り上げず、一齋は刊行には至らなかつたがそのような作品も評價していたことが窺われた。このような違いは何に由来しているのだろうか。再び『精言』、『粹言』の序に目を向け、二人の考え方の違いについて検討してみたい。

二つの序は、それぞれ次のように締めくくられている。まず『精言』序の末尾を掲げる。

文辭源於典謨、流而入俗。雖俚謂鄙語也、豈出於字故囿。亦弗深思已。屬者有梓小説者、餘譯以付之、又別爲之譯義、回敘小説所繇。讀者求諸字故、以此爲一隅、思則過半矣。「文辭の源は典謨であり、流れて俗に入

「和刻三言」採録篇に見える小説の評價ついで（宮本）

つたのである。卑しい俗語といつても、どうして字の元の領域から出ることがあろうか。深く考えていないだけなのである。近頃刊行された小説があるが、私が譯してこれに付し、また別にこの譯義を付して、小説の由る所を回敘した。讀者は諸々を字の元の意味に求め、これを端として考えれば、大半を理解することが出来るのである。」

この直前には、俚言の難しさと、それを解するためには必ずしも「華音」が必要なわけではないことが説明されている。また「而至讀不能句。實學人之大闕也（しかし讀むときに句をとることが出来ないのは、學ぶ人にとって實に大きな問題である）」と「學人」の存在を取り上げる。白駒は序の後半部を用いて解釋の難しい語や俚言について述べ、³¹最後には右のように「字故（囿）」から深く考えれば解すことが出来るのだと説く。ここから彼が白話小説の文や語句に注目しており、小説を學ぶものと見ていることが窺われる。

次に『粹言』序を掲げる。

餘誦習暇日、耽小説家書、賞以獨感、隨抄隨譯。裝爲

十回、舊藏帳中、以其汰淫媒猥褻、題曰粹言。比日命劊劊以廣其傳。嗚乎、誰邪千里神交、如攻吾癖、雙眸一過、拍掌發狂、至不自覺古今遠近之隔、期可謂善讀小說矣。「私は誦習の暇な時に、小説家の書にふけて、鑑賞してひとり感じ入り、書き寫しては譯した。

装丁して十回としたが、舊藏の帳の中の猥褻なもののはのぞいたので、『粹言』と題した。この頃、刻工に命じて以てその傳を廣める。ああ、誰かが時や場所を超えた交わりをして、私の嗜好を學び、(この小説を)兩目でひとたび見て手を叩いて大いに喜び、時代や場所が違うことを忘れるに至ったなら、(その人は)小説を讀むのに優れていると言つてもよいのではないか。」

一齋の序には文や語句に關する言及はなく、主に小説の性格が述べられており、「書童遣情悅目(子供たちは氣晴らしに目を喜ばす)」とその效用に觸れる一文も見える。最後の「善讀小説」というのは、文の意味を正しく解して讀むというよりも、小説をよく鑑賞するという意味合いが強いだろう。この序からは、一齋が重視しているのは文や語句

ではなく、その内容であることが讀み取れる。二人の序の末尾からは、白駒は白話小説を「學ぶ」ものと捉え、一齋は勉強の暇に「讀んで楽しむ」ものと捉えていることが窺われる。

繰り返しになるが、白駒の唐話學習の最終目的は經典の正しい理解であり、白話小説はその唐話學習の「教材」と捉えられていたと推測される。そのため、「托談見志、因事道治。」の小説であつても、「子は怪力亂神を語らず」の言葉に背くものを讀者に提示すべきではないと考えたのではないか。

そして、「教材」という認識から想起されるのは、やはり荻生徂徠らの古文辭派である。古文辭派を中心とした江戸の學者達も唐話を學ぶ過程で白話小説を讀んだようだが、あくまで教材として利用していたと推測されている²⁰。白話小説の讀解が進んだのは上方においてであり、和刻本・通俗本等も概ね上方から刊行されて廣まった。古文辭派を強く意識する白駒と、その白駒に學んだとはいえ、上方で出版業を営んでいた一齋が認識を異にしたのは、自然なこと

であったように思われる。或いは、『精言』『奇言』が比較的読みやすい形で刊行されたことよって、『粹言』刊行が企畫された頃には白話小説が「讀み物」であると廣く認識されていた可能性も考えられる。

筆者は以前白駒と一齋がそれぞれ行つた『水滸傳』講義を比較し、白駒の講義が本文中の語句を解することを主としてゐるのに對し、一齋の講義は物語の内容自体も讀むことが出来る形式で行われたと推測した³³。そこでは講義の底本に要因があると論じたが、二人の白話小説に對する認識がすでに異なつていたという可能性も指摘できるかもしれない。『水滸傳』は包含する語彙の豊富さと白話文の完成度の高さから、當時唐話學習の教材として最も用いられた。白駒にとつて『水滸傳』はそのまま教材であつたが、一齋にとつては唐話を學ぶためだけでなく、讀んで楽しむためのものになりつつあつたのではないか。作品の選擇が必要となる短篇白話小説の刊行は、施訓を手掛ける二人の認識の違い、白話小説受容の變化を反映していると考えられる。

む す び

以上「和刻三言」収録篇の選擇、小説の評価について検討を進めてきた。唐話の教材として利用された白話小説が、鑑賞して楽しむものとなつていく契機の一つは、この時期にあつたのではないかと推測される。ただし當然ながら、白駒と一齋の考えが今回取り上げた序文に率直に表れてゐるとは斷言出来ない。また『粹言』の後五卷の刊行がなされなかつた要因については今回検討を行うことが出来なかつた。二人の著述活動、他の書物に寄せた序跋等から、彼らの考えを更に検討していく必要がある。

さて、『精言』刊行から六年後の寛延二（一七四九）年には、『三言二拍』の翻案であり、讀本の嚆矢として知られる都賀庭鐘著『英草紙』が刊行される。『奇言』『粹言』に先立つ刊行であり、「和刻三言」とともに「三言二拍」受容の早い例として認められる。最後に、先行研究から庭鐘の小説評價について窺い、むすびに代えたい。

『英草紙』の素材については、すでに多くの研究者が検

討している。尾形伋氏は庭鐘が歴史や政治に關わりの深い話を選んで目に着目し、中國では「庶民小説」として創作されたものが、「庭鐘においては士大夫の文學に近い性質を帯びた一種の歴史小説として受け止められた」と述べる。本稿「一 想定される選擇基準とその問題點」で紹介した尾形氏の説は、この考察との關連から導き出されたものであろう。

徳田武氏は尾形氏の説に對し、庭鐘が素材とした小説の中には庶民の意識・心情を反映した題材と筋を所有するものもあることを指摘した。そして庭鐘が白話小説の通俗性・卑俗性をも認め、そのような小説を翻案する際に「自己の内に貯えておいた雅意雅情をもち込んで、雅文藝にまで上昇させようと意圖した」と述べる。また「雅文藝」には、個人道徳の教訓の外に、更に政治的モラルを包含する、より高次の「義」の勸告が必須條件であつたと論じている。³⁴⁾

本稿で注目した非現實性の評價という點ではどうか。『英草紙』の素材となつた小説には、殺された男が幽霊となつて現れる「三現身包龍圖斷冤」(『警世通言』卷十三)、

莊子が分身の術を使って妻を試す「莊子休鼓盆成大道」(『警世通言』卷二)、『今古奇觀』卷二十)、また地獄を舞臺とする「開司司馬貌斷獄」(『古今小説』卷三十一)、『諭世明言』卷十五)といった非現實的な要素を含むものがあり、庭鐘はそれらの要素を残して翻案している。また庭鐘は序の中で、「彼の釋子の説ける所、莊子が言ふ處、皆怪誕にして終に教となる。紫の物語は言葉を設けて志を見し、人情の有る處を盡す。」と述べている。「怪誕」には、怪しく不思議な、非現實的な要素も含まれると推測される。『今古奇觀』の編者や白駒が採録を避けた小説を、庭鐘は積極的に評價していたことが窺われる。

すでに飯倉洋一氏が指摘しているように、江戸幕府が儒教を教學と定めた近世期においては、非現實的な話を語ることは本来難しいはずである。飯倉氏は「表向きは無鬼論の立場に立つ近世の儒教的世界觀に即したときに、怪異の話を活用するには、それを虚構として活用しなければならぬ。怪異を虚構として敘する論理として寓言論があつたことは疑いない。」と、寓言という方法に着目する。そし

てこの方法が『玉櫛笥』（林義端著／元祿八／一六九五序）等の浮世草子怪異物にすでに見られ、『田舎莊子』（享保十二／一七二七刊）を筆頭とする佚齋樗山の談義本作品群、『英草紙』等の初期讀本まで共通して見られることを指摘した^③。寓言という方法によって、庭鐘は非現實的な要素をむしろ積極的に活用し、「義」を描こうとしたと考えられる。徳田氏は「庭鐘は一個の儒者として、下は「修身齊身」の古人道徳から、上は「治國平天下」の政治的モラルを獻策すること、「經世濟民」の義務を國字小説という虚構に載せて果たそう、という意圖を抱いていたと考えられる。」と述べる^④。白駒、庭鐘ともに儒者を自覺していたと考えられるが、白駒は『論語』の「子は怪力亂神を語らず」の言葉に従いつつ、白話小説を經典理解につながる一種の語學教材として利用し、庭鐘は、徳田氏の言を借りれば、經典の教えを廣める「國字小説という虚構」の素材として利用したと推測される。二人は同じ儒者という立場から、それぞれの方法で白話小説を利用しようとしたと言えぬのではないだろうか。

「和刻三言」採録篇に見える小説の評價ついで（宮本）

一齋は先に推測したような認識のほか、『英草紙』を閲覽してその素材に氣が付き、様々なテーマ・性格の白話小説に需要があると考えたのかも知れない。今回取り上げた一齋の序からは、儒者としての考えを汲み取ることは難しい。また彼については、書肆の主人としての立場や、翻案・翻譯ではなく創作白話小説を手がけたという點も、併せて検討していかなければならない。

「和刻三言」は日本に「三言二拍」を紹介したという點で高く評價されてきた。しかし今日、白話小説受容の變化を伝えるものとしても評價することが出来るのではあるまいか。本稿で残した課題と併せて、當時の白話小説受容における「和刻三言」の位置づけについて更に考察を深めた

註

- ① 明末頃に中國で刊行された短篇白話小説集、馮夢龍編纂の『古今小説（後『喻世明言』と改題）』、『警世通言』、『醒世恆言』と、凌濛初編纂の『初刻拍案驚奇』、『二刻拍案驚奇』の總稱。各四十篇ずつ収録する。選集に本文中で取り上げる

『今古奇觀』や、『小説選言』（十八卷十八篇）がある。

② 石崎又造「諷刺小説の翻案と讀本の發生」（近世日本に於ける支那俗語文學史）第五章第二節／弘文堂書房／一九六七）に「我が『三言』の有する史的價值は、只それ自身が國文學小説の粉本に供せられたといふことではなく、彼の土の三言・拍案驚奇・西湖佳話等の短篇小説を紹介して我が國文學小説の新生面への道を打開してやつたといふことである。」と述べられている（二一九頁）。

③ 複數に原據が認められる場合は、表中に全て掲げ、「和刻三言」が依據した可能性の高いものに圍み線を付した。原據については、尾形仿「解説」（岡白駒・澤田一齋施訓 小説三言）所收／ゆまに書房／一九七六／八七〇―八八二頁）、大塚秀高・王佳「小説粹言」の依據した白話短篇小説集―不置堂本『今古奇觀』と『小説選言』（中國古典小説研究 第十八號／中國古典小説研究会／二〇一三）、拙稿『小説精言』『小説奇言』の底本について―本文の性格をめぐって―（『和漢語文研究』第十六號／京都府立大學國文學會／二〇一八）に據る。

④ 前掲注③尾形氏八九一―八九二頁。

⑤ 全文は以下の通り。「小説亦一家已。葑菲胡累于下體。海舶攸貢。年以百住。俚言賊人。微直爰居之鐘鼓也。龍洲先生所譯。意義渙釋。宛乎如面聽西人警歎。粵壽梨棗。以廣其傳。据此斬之。三隅其庶矣。風月堂主人澤文拱識」（岡白駒・澤

田一齋施訓 小説三言」（ゆまに書房／一九七六）所收の影印による。以下「和刻三言」の序、本文は全て同書より引用する）。

⑥ 以下、前掲注③尾形氏八八八―八九二頁による。

⑦ 『今古奇觀』諸本については丸井貴史氏が詳細な調査を行われているが、全く別の序文がついていることが指摘されたのは一種のみ（經文堂刊本）である。（丸井貴史「『今古奇觀』諸本考」／『和漢語文研究』第十一號／京都府立大學國文學會／二〇一三）。また諸版本間の序における異同については、材木谷敦「序はいかに書かれたか―『今古奇觀』の場合―」（中國文學研究）第十七期／早稻田大學中國文學會／一九九一）に指摘がある。

⑧ 以下『今古奇觀』の序文は上海圖書館藏本（上海古籍出版社『古本小説集成』所收の影印）を使用。

⑨ 前掲注⑦材木谷氏。

⑩ 千田九一・駒田信二譯『今古奇觀（一）』「解説」（平凡社／一九六五）三〇四―三〇五頁。

⑪ 大木康「『三言』序の問題」（馮夢龍と明末俗文學）第二部第一章第五節／汲古書院／二〇一八）一二六―一二七頁。

⑫ 『尚書』「畢命」編に「旌別淑慝。表厥宅里。彰善癉惡。樹之風聲。」とあるのを踏まえたと思われる（賀島矩直點『尚書』卷一〇／二二丁表／寛延四（一七五二）年京都風月堂等刊（『和刻本經書集成』第五輯／汲古書院／一九八

七／三六三頁所収の影印を使用)。

- ⑬ 「良史之遺意」は「歴史官の遺した意」、或いは「歴史の忘れ物」とも取れるか。本文中の譯は、前野直彬氏が徂徠の書簡「復安澹泊」中の一文、「祇季王心在良史。而不違及六經。不佞乃用諸六經。爲有異耳。」を「ただ李・王二氏は良史(すぐれた記述者)となることに志があつて、六經まで手を出す餘裕がなかったのに、私はそれを六經の解釋に應用した點が、違ふといえるだけです。」と解されたのを参考にした(『日本の名著16 荻生徂徠』「徂徠集(抄)」〔中央公論社／一九八三〕二八八頁。右の本文は『日本思想大系36 荻生徂徠』「徂徠集」〔岩波書店／一九七三〕五三七頁に據り、訓點は省略して示した)。

- ⑭ 前掲注③拙稿。二十四卷本は東京大學東洋文化研究所雙紅堂文庫に藏されている(編號：D862100)。これには澤田一齋の藏書印が捺されており、『精言』編纂に使われたものである可能性が高い。題、序は『醒世恆言』であるが、通常知られる四十卷本『醒世恆言』中の二十二篇に加え、『警世通言』から一篇、『初刻拍案驚奇』からも一篇採っており、選集のような性格も持っている。その他書誌等については、大塚秀高『増補中國通俗書目』(汲古書院／一九八七)一五頁に詳しい。

- ⑮ 中國でも黃叔琳が本文を校訂し詳細な注を付けたものが乾隆六(一七四一)年に刊行されたが、白駒の訓點本はそれに

「和刻三言」採録篇に見える小説の評價ついで(宮本)

十年先行したことになり、その點でも高く評價されている。

- 戸田浩曉「岡白駒の文心雕龍開版について」(『中國文學論考』第一編／汲古書院／一九八七)一二七―一五四頁、門脇廣文「日本最初の『文心雕龍』の版本」(『文心雕龍の研究』附録第三章二／創文社／二〇〇五)四〇三―四〇九頁参照。
- ⑯ 戸田浩曉譯『文心雕龍(上)』「解題」(新釋漢文大系六十四／明治書院／一九七四)五頁、『文心雕龍(下)』(新釋漢文大系六十五／明治書院／一九七八)六七四―六七六頁、目加田誠譯『文心雕龍』「解題」(目加田誠著作集第五卷／龍溪書舍／一九八六)四六六―四六七頁参照。

- ⑰ 岡白駒校正句讀『文心雕龍』(享保十六(一七三二)年／難波文海堂刊。『和刻本漢籍隨筆集』第十六集〔汲古書院／一九七七〕所収の影印を使用)。訓點は省略し、句讀點、譯は筆者が付した。

- ⑱ 『論語』「公治長」篇に「子貢曰、夫子之文章、可得而聞也。夫子之言性與天道、不可得而聞也。(子貢は言った。「先生が、具體的な文化について話されるのを、聞くことは出来るが、性や天道について話されるのを、聞くことは出来ない」)(井波律子譯『完譯論語』一二〇―一二二頁)とあるのに基づいていると推測される。井波氏は「文章」を「具體的な文化」と解され、また徂徠は「論語徵」(元文／一七三七刊。『荻生徂徠全集』第三卷〔みすず書房／一九七七〕所収の影印を使用)の中で「夫子之文章。謂禮樂也。」と述べているが、白

駒の序では「文辭」の意味で使用していると見られる。

- ⑲ 日野龍夫氏は白駒が白話小説や漢文笑話を取り上げたことは評價する一方、「数多い著作のほとんどは儒者の古典の通俗的な注釋書で、儒者としての業績に見るべきものはない。」と述べる（『日本古典文學大辭典』第一卷／岩波書店／一九八三）。また村上雅孝氏は『先哲叢談』（永祿から享保年間に至るまでの著名な儒者の傳記集。原念齋著。文化十三／一八一六年刊）に見える白駒の評價の低さや、日野氏の指摘を踏まえた上で、「白駒の儒學は、その著作から見ると、思想的な深みはなく、朱子學者によく見られる訓詁注釋的な考證を主にしていたように思われる。」と考察する（『岡白駒と訓譯』／『國語學研究』第五十四集／東北大學學院文學研究科國語學研究室／二〇一五）。
- ⑳ 前掲注⑮戸田氏一三八—一四〇頁。
- ㉑ 白駒の古文辭學との接觸は檜垣里美「岡白駒年譜」（『岡白駒・澤田一齋施訓 小説三言』所收／ゆまに書房／一九七六）八九四—八九五頁に指摘されている。また白駒の著述の中には、徂徠の『論語徵』を批評する目的で著した『論語徵批』、また徂徠の高弟であつた服部南郭の『新刻蒙求』を意識した『蒙求箋註』等、古文辭派の影響を受けたものが見られるという（八九八、九一六頁）。
- ㉒ 戸田浩曉著『文心雕龍（上）』（新釋漢文大系六四／明治書院／一九七四）二一四—二一五頁を引用した。尙、本文は白

駒施訓の和刻本によって校訂し、訓點は省略して示す。

- ⑳ 前掲注⑲戸田氏の注釋に據れば、「蠶婢鄙諺」は死んだ兄のために喪服を着なかつた男が、禮にやかましい孔子の門人が村の長官になると聞いて喪服を着たことを誇つた話。喪服を着たのは決して兄に對して喪に服したのではなく、無關係であるということ、蠶は紡いだ繭を入れる箱がなく、蟹には箱があるが蠶のためにはないことに喩えている。
- 「狸首淫哇」は、孔子の古い友人・原壤が自分の母の棺桶を作る材木を見て「木目の美しさは狸のあたまのぶちのごと。手に取れば女の手のような柔らかさ」と歌い、孔子はそれを聞かぬふりをしたという話。
- ㉑ 前掲注⑮戸田氏一四二—一四三頁。
- ㉒ 前掲注⑮戸田氏一四三頁。
- ㉓ 『醒世恆言』（二十四卷本）序では精神が濁つた状態「醉」と醒めた状態「醒」（またこれが「恆」と説明される）を對比し、「從恆者吉、背恆者兇」等と「恆」であることの重要性が説かれる。そして「六經國史而外、凡著述皆小説也、而尙理或病干艱深、修詞或傷干藻繪、則不足以觸里耳而振恆心」と述べる箇所からは、『醒世恆言』が收めるような通俗的な小説こそが人々の「恆心」を奮い起こすことが出来るのだという考えが窺われる。『醒世恆言』の前に刊行された『古今小説（喻世明言）』『警世通言』序ではより積極的に風化が説かれているが、材木谷氏が指摘するように、小説を風

化の尺度とまでは考えていないように見受けられる。「三言」序については前掲注⑦材木谷氏の論考のほか、前掲注⑪大木氏の論考（二二二—二七頁）に詳しい。

②⑦ 前掲注②戸田氏七二頁。

②⑧ 「鏡花水月」は詩歌等を評する語で、詩の興趣を指す語と考えられる。明の謝榛が撰した詩論書『詩家直説』卷一に「詩有可解、不可解、不必解、若水月鏡花、勿泥其迹可也」

（李慶立・孫愼之箋注『明清文學理論叢書 詩家直説箋注』

齊魯書社／一九八七）一頁）とあるのが詩論に用いた早

い例と思われるが、注によればこれは南宋の嚴羽による詩論書『滄浪詩話』「詩辨」に「如空中之音、相中之色、水中之月、鏡中之象、言有盡而意無窮」とあるのに基づくという。

近世期の日本でも、享保十一（一七二六）年に『滄浪詩話』が刊行される等（江戸須原屋新兵衛刊行、石川之清編『詩品三種』に収録）、當時中國の詩話が讀まれていたことが窺われる。「三昧」は本來佛教語で悟りの境地のこと。「鏡花水月三昧」とは、事實に基づく正史とは異なる、心で感じる世界を描きつくしていると解釋した。

②⑨ 『抱朴子』外篇卷一「嘉遯」に「雖復下帷覃思、殫毫騁藻、幽贊太極、闡釋元本、言歡則木梗怡顏如巧笑、語戚則偶象頓顛而滂沱、抑輕則鴻羽沉於弱水、抗重則玉石漂於飛波、離敗則肝膽爲胡越、……然不能沾大惠於废物、著弘勳於皇家、名與朝露皆晞、體與蜉蝣並化、忽崇高於聖人之寶」とある

「和刻三言」採録篇に見える小説の評價ついて（宮本）

（『文淵閣四庫全書』により、句讀點は私に付した）。

③⑩ 前掲注③尾形氏八八七—八八八頁。「小水灣天狐詒書」は『醒世恆言』四十卷本でも卷六に収録される。

③⑪ この前では、「欲榜諭律令。上下易通曉也。於是乎有官府律令之語矣。若夫諱辟換文。轉借成義。」と、具體例を挙げながら説明している。

③⑫ 石崎氏は「江戸に於ける冠山及び徂徠の護園を中心とする唐話學者は、單なる唐話學の流行に止まり、白話小説に至つては概して俗語研究の補助として讀む程度に過ぎなかつたやうである。」と述べる（注②前掲書第一節第五章「白話文學と國文學」一七五頁）。また徳田武氏はその要因について「江戸の護園の唐音流行が一時的なものに終わつて、上方のように翻案小説が出現するほどに深くなつたものも、結局俗語文藝を正統の學の對象としなかつたからではあるまいか。」と推測している（『近世日本小説と中國小説』第二部第一章「英草紙」と三言—「俗に即して雅を爲す」—／靑裳堂書店／一九八七—一五四頁）。

③⑬ 拙稿「澤田一齋の『水滸傳』講義をめぐつて」（『日本中國學會報』第七十集／日本中國學會／二〇一八）。

③⑭ 尾形氏「中國白話小説と『英草紙』」（『文學』三十四—三／岩波書店／一九六六）。

③⑮ 前掲注③徳田氏一五六—一五八頁。

③⑯ 筆者はこの篇を非現實的なものと判斷したが、『今古奇

觀』にはこれが収められている。また先に白駒が選擇しなかつたものとして二十四卷本『醒世恆言』卷四「灌園叟晚逢仙女」を挙げたが、これも『今古奇觀』卷八に収められており、この二篇が『今古奇觀』中のほとんど唯一の例外と言える。この點に關しては更なる検討が必要であるが、本稿では今回定めた基準によつて非現實的と判斷される小説がどのように扱われているかという點に着目する。

③7 『新編日本古典文學全集78 英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』（小學館／一九九五）一九頁。

③8 飯倉洋一「怪異と寓言 浮世草子・談義本・初期讀本」〔『西鶴と浮世草子研究』第二號／笠間書院／二〇〇七〕。

③9 前掲注③2 徳田氏一六二—一六三頁。

④0 一齋は京都で實際に起きた事件をもとに創作された白話小説『演義俠妓傳』の作者と見られている。『中村幸彦著述集』第七卷（中央公論社／一九八四）に解説と影印が収録される。

本稿は平成三十一年度科學研究費助成事業・特別研究員奨励費・課題番號一九J〇一〇九七「漢籍解釋から見る言語觀の確立——日本近世期における唐話學再評價」の成果の一部である。

表一

書名	卷・題	原 據
『小説精言』	卷一「十五貫戲言成巧禍」	『醒世恆言』卷三十三「十五貫戲言成巧禍」
卷二「喬太守亂點鴛鴦譜」	『醒世恆言』卷八「喬太守亂點鴛鴦譜」	
卷三「張淑兒智脫楊生」	『今古奇觀』卷二十八「喬太守亂點鴛鴦譜」	
卷四「陳多壽生死夫妻」	『醒世恆言』卷二十一「張淑兒智脫楊生」	
『小説奇言』	卷一「唐解元玩世出奇」	『警世通言』卷二十六「唐解元一笑姻緣」
卷二「劉小官雌雄兄弟」	『今古奇觀』卷三十三「唐解元玩世出奇」	
卷三「滕大尹鬼斷家私」	『醒世恆言』卷二「劉小官雌雄兄弟」	
	『小説選言』卷八「劉小官雌雄兄弟」	
	『古今小說』卷十「滕大尹鬼斷家私」	
	『諭世明言』卷三「滕大尹鬼斷家私」	
卷四「錢秀才錯占鳳凰儔」	『今古奇觀』卷三「滕大尹鬼斷家私」	
	『小説選言』卷十七「滕大尹鬼斷家私」	
	『醒世恆言』卷七「錢秀才錯占鳳凰儔」	

「和刻三言」採録篇に見える小説の評價ついで（宮本）

	<p>卷五「梅嶼恨蹟」</p>	<p>『今古奇觀』卷二十七「錢秀才錯占鳳凰儔」 『西湖佳話古今遺蹟』卷十四「梅嶼恨蹟」</p>
『小說粹言』	<p>卷一「王安石三難蘇學士」</p>	<p>『警世通言』卷三「王安石三難蘇學士」</p>
<p>卷二「轉運漢巧遇洞庭紅」</p>	<p>『初刻拍案驚奇』卷一「轉運漢遇巧洞庭紅 波斯胡指破鼃龍殼」 『今古奇觀』卷九「轉運漢巧遇洞庭紅」</p>	
<p>卷三「呂大郎還金完骨肉」</p>	<p>『警世通言』卷五「呂大郎還金完骨肉」 『今古奇觀』卷三十一「呂大郎還金完骨肉」 『小說選言』卷五「呂大郎還金完骨肉」</p>	
<p>卷四「包龍圖智賺合同文」</p>	<p>『初刻拍案驚奇』卷三十三「張員外義撫螟蛉子 包龍圖智賺合同文」 『小說選言』卷三「包龍圖智賺合同」</p>	
<p>卷五「襲私怨狼僕告主翁」</p>	<p>『初刻拍案驚奇』卷十一「惡船家計賺假屍銀 狼僕人誤投真命狀」 『今古奇觀』卷二十九「懷私怨狼僕告主翁」 『小說選言』卷十三「懷私怨狼僕告主」</p>	